しんぱん
しどうようもんしゆう
新版 指導要文集

だいにししよう
じっせん

第二章 実践

しどうしや

指導者

いったい 嘗
一 一滴をなめて だいかい
大 大海のしおをしり、 潮
知
一 花を見て いか
み
はる
すい
推 推せよ。

005 かいもくしよ
開目抄

しどうしや
指導者
100 ページ 17 行

きよう い

経に云わく「いわゆる諸法の如是相」と申すは何事ぞ。

じゆうによぜ

はじ

そうによぜ

だいいち

だいいじ

そうら

ほとけ

よ

しよほう

によぜそう

もう

なにごと

十如是の始めの相如是が第一の大事にて候えば、仏は世

出

たも

ちじん

き

知

じゃ

じゃ

知

にいでさせ給う。「智人は起をしる。蛇はみずから蛇をし

る」とは、これなり。

(009 撰時抄

せんじししょう

しどうしや
指導者 205 ページー7 行)

「教きょういいよいよい実じつなれば位くらゐいいよいよい下くだし」

（012 四信五品抄
ししんごほんしよう）

指導者しどうしや
265 ページー14 行

みみようようらくらくだいだいしし　ししやくやく　おおしし
妙楽大師の釈に「教おしえがいいいよいよい高たかく勝すぐれるほど、その教おしえを

ししゆぎようよう　ひひとと　くくららゐゐ　ひひくく
修行する人の位はいいいよいよい低ひくくなる」とあります。

「こうい綱維をひ提くに目として動うごかざること無く、な衣の一角をころも牽ひくに縷るとして来きたらざること無なきがごとし」。

034 しやうぐもんどうしやうじやう聖愚問答抄上

しどうしや指導者 581 ページ 1 行

こくしゆり おや ひ かたき ひと
国主は理を親とし非を敵とすべき人にておわすべきが、
いかんがしたりけん、諸人の讒言をおさめて、一人の余を
すて給う。たも

047 神国王御書
しんこくおうごしよ

指導者 しどうしや
682 ページー11行

にちれん ぼけきよう かんじん だいもく にほんこく ぐつう そうろう

日蓮が法華経の肝心たる題目を日本国に弘通し候は、

しよてんせけん まなこ

まなこ いつ

諸天世間の眼にあらずや。眼には五つあり。いわゆる、

にくげん てんげん えげん ほうげん ぶつげん

肉眼・天眼・慧眼・法眼・仏眼なり。

かんぎようはちまんしよう

(050 諫曉八幡抄

しどうしや

指導者 738 ページー5行)

かんてい ちょうしよう

し

りようしよう

あやま

あんちゆう

澗底の長松いまだ知らざるは良匠の誤り、闇中の

きんい み

ぐにん とが

錦衣いまだ見ざるは愚人の失なり。

ほうじょうときむね

ごじょう

(064 北条時宗への御状

しどうしや

指導者

855 ページ 5 行)

はかりごと いちよう うち めぐ
謀 を帷帳の中に回らし、勝つことを千里の外に決せし
ものなり。

(078 一昨日御書
いっさくじつごしよ)

指導者 874 ページ 1 行
しどうしや

くろがね きた う つるぎ
鉄は炎い打てば劍となる。賢聖は罵詈して試みるな
るべし。

(さどごしよ
122 佐渡御書

しどうしや
指導者 1288 ページー1行

てつ う つるぎ
鉄はきたえて打てば劍になります。賢人といわれる人は世間から
わるくち はくがい けんじん ひと せけん
悪口をいわれ、迫害をうけてためされてはじめて、その立派さがわ
かるものです。

しろ しゅたけ
城の主剛ければ、
まも もの つよ
守る者も強し。
しろ しゅお
城の主慥ずれば、
まも もの
守る者
も
忙
ず。
お

(
136
道場神守護事
どうじょうしんしゅごじ

しどうしや
指導者
1320
ページー16行

そ けんじん やす い あや おも ねいじん あや
夫れ、賢人は安きに居て危うきを欲い、佞人は危うきに居
て安きを欲う。
やす おも

(137) 富木殿御書 (止暇断眠御書)

ときどのごしよ し くだんみんごしよ
しどうしゃ
指導者 1323 ページ 7 行

けんじん あんぜん たちば たいおう
およそ賢人は安全な立場にあつても、いざというときに対応でき

こころがま しょうらい きけん たい ばんぜん はいりよ
る心構えで、将来の危険に対して万全の配慮をしています。

ほんたい しょうにん じぶん み きけん き
反対に、小人は、自分の身が危険にさらされていてもそれに気づか

もくぜん あんいつ た なげ
ず、目前の安逸をむさぼり、なおその足りないことを嘆いているの

です。

師し子し王おうの剛ごう弱じやくを嫌きらわずして大だい力りきを出いだすがごとし。

145 諸しよ経きようと法ほ華け経きようと難なん易いの事こと

指導者しどうしや
1346 ページー6行

そ てんち くに みようきよう
夫れ、天地は国の明鏡なり。いま くに てんさいちよう
し こくしゆ とが
知るべし、国主に失ありということ。かがみ 浮
あらせ
ば、これを諍うべからず。こくしゆしyouか とき てんきよう
しょうさいみ いま だいさい まさ し
小災見ゆ。今の大災は、当に知るべし、たいか
ことを。

(164 法蓮抄 ほうれんしyou)

しどうしや
指導者 1430 ページー14行)

よ 治 代のおさまれるには賢人見えず、
よ みだ 代の乱れたるにこそ

しょうにん ぐにん あらわ そうら
聖人・愚人は顕れ候え。

ひょうえのさかんどのごしよ
178 兵衛志殿御書

しんぷにゆうしん こと
(親父入信の事)

しどうしや
指導者 1493 ページ 2 行

賢人は、八風と申して八つのかぜにおかされぬを、賢人と
申すなり。利い・衰え・毀れ・誉れ・称え・譏り・苦し
み・楽しみなり。おお心は、利いあるによるこばず、
おとろうるになげかず等のことなり。この八風におかされ
ぬ人をば、必ず天はまぼらせ給うなり。しかるを、ひり
に主をうらみなんどし候えば、いかに申せども、天まぼ
り給うことなし。

(206) 四條金吾殿御返事 (八風抄)

指導者 1565 ページ 3 行

けんじん

はつふう

はしゆ

かせ

ひと

賢人てや八風といて八種の風におかされない人をいうのです。

はつふう

うるおい

おとろえ

やぶれ

ほまれ

たたえ

そしり

くるしみ

たのしみ

やつ

八風とは、利・衰・毀・誉・称・譏・苦・樂の八

いみ

せけんてき

りやく

よろこ

おとろ

つです。だいたいの意味は、世間的な利益があつても喜ばず、衰え

なげ

はつふう

ひと

るのを嘆かないなどということ。この八風におかされない人

しよてんぜんじん

まも

どうり

を、諸天善神はかならず守られるのです。しかし道理にそむいて

しゆくん

うら

ひと

いの

しよてん

まも

主君を恨んだりするような人は、どんなに祈つても諸天に守られな

いのです。

ちしや　もう
智者と申すは、くに国のあやうきをいさめ、ひと人の邪見を申し
止ちしや
とどむるこそ智者にてはそろう候なれ。

(よりもとちんじよう
207 頼基陳状

しどうしや
指導者
1573
ページー10行

ししおう ぜんさんごいち もう 蟻 こ と
師子王は、前三後一と申して、ありの子を取らんとするに
も、またたけきものを取らんとする時も、いきおいを出だ
すことは、ただおなじきことなり。

225 経王殿御返事
きょうおうどのごへんじ

しどうしや
指導者 1632 ページ 15 行

いくさ だいししょうぐん たましい たいししょうぐん 臆
軍には大將軍を魂とす。大將軍おくしぬれば、歩兵
おくびよう
臆病なり。

(242 乙御前御消息
おとごぜんごししょうそく

しどうしゃ
指導者 1688 ページ 14 行

いくさ だいししょうぐん たましい
戦には大將軍を魂とするのです。大將軍が臆したならば
ぶか へい おくびよう
部下の兵はことごとく臆病となつてしまいます。

ひと ふね の

せんどう

計

ごと

いちどう

一つ船に乗りぬれば、船頭のはかり事わるければ一同に

せんちゆう しよにんそん

み 強

ひと

こころ

おお

船中の諸人損じ、また身つよき人も、心かいらければ多

のう むよう

くの能も無用なり。

おとごぜんごししようそく

(242 乙御前御消息

しどうしや

指導者 1690 ページー2行)

いっせき ふね の あ

せんどう

かじと

わる

一隻の船に乗り合わせてしまえば、もし船頭の舵取りが悪ければ

いちどう

せんちゆう

ひと

いのち

そこ

一同に船中の人びとは命を損なってしまうでしょう。またどんな

からだ つよ

こころ

よわ

おお

のうりよく

やく

に体が強くても心が弱ければ多くの能力があつてもなんの役に

た

も立ちません。

賢人けんじんと申もうすは、善ぜんしつたひとしょうにんと申もうすは、
師し無なくして我われと覚さとれる人ひとなり。

(251 妙密上人御消息みょうみつしょうにんごししょうそく)

指導者しどうしや
1710 ページ 8 行

こくおう 宝 国王のたからは左右の大臣なり。左右の大臣をば塩梅と申す。味噌 塩 味そ・しおなければ、よわたりがたし。左右の臣なければ、くに 治 国おさまらず。

308 南条殿御返事 (大橋太郎の事)

指導者 1856 ページ 13 行

ひと 教 人のもを おしうると申すは、 くるま 重 車のおもけれど油をぬ
回 船 みず 浮 行 易 油をぬ
りてまわり、 ふねの水にうかべてゆきやすきようにおしえ
そろう
候なり。

337 上野殿御返事 (須達長者御書)

うえのどのごへんじ

すだつちようじやごしよ

指導者 1918 ページ 7 行

しどうしや

ひと おし 人がものを教えるということは、 しゃりん おも とき あぶら 車輪が重い時には油をぬれば
ふね みず う 船を水に浮かべれば行きやすいように、 教えるものなの
です。

ちしや せけん ほう ほか ぶつぽう おこな せけん ちせい
智者とは、世間の法より外に仏法を行わず。世間の治世
の法を能く能く心えて候を、智者とは申すなり。

363 減劫御書

しどうしや
指導者
1968 ページ 12 行

しゅう ぶんおう お もの 養 戦 か
周の文王は老いたる者をやしないていくさに勝ち、その
すえさんじゅうしちだいはつびやくねん あいだ 末 々 僻 ごと
末三十七代八百年の間、すえずえにはひが事ありしか
こんぽん く 榮 たも
ども、根本の功によりてさかささせ給う。

406 日女御前御返事 (囑累品等大意の事)

しどうしや
指導者 2096 ページ 14 行

しゅう ぶんおう お もの たいせつ やしな たたか か しそん
周の文王は、老いた者を大切に養って戦いに勝ち、その子孫
さんじゅうしちだいはつびやくねん あいだ まつだい あくせい じだい
は三十七代八百年の間、末代には悪政の時代もありました
こんぽん ぶんおう く なが さか
が、根本である文王の功によって長く栄えることができたのです。